

報告3「学内・大学間でのFDネットワーク構築」

松 下 佳 代（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）

（松下） それでは早速、始めさせていただきます。本日の発表ですが、まずFDネットワークの構築とはどういうことか、次に京大におけるFDの学内組織化の状況について、その後に大学間連携の例として、関西地区FD連絡協議会の活動は今どんなことを行っているのかをお話しします。そして、その一つの試みですが、関西FDパイロット校という試みがあります。それについて、少し詳しくお話ししたいと思います。

まずFDネットワークの構築ですが、これについては、まず背景を2枚のスライドでお示ししているのですが、もう既に今泉さんからお話がありましたので簡単に済ませたいと思います。大きく言いますと、二つあります。一つは、質保証とFDの義務化という点です。FDが義務化されたけれども、実際にはなかなか自前ではFD活動を行えない大学もありますので、FDのためのリソースを共有していこう。どこの大学も似たようなことをやっているのだから——もちろん個々別々のものもありますが——、似たようなことをやっている部分については共有できるのではないかとということです。

もう一つは、競争と協同のバランスです。10年前の大学審答申では競争が非常に強調されていたのですが、昨年4月に出た中教審答申や、12月に出た「学士課程教育の構築に向けて」という答申の中では、競争と協同のバランスということがいわれています。一方では教育GPのような競争的資金を配分することもあります。もう一方で、拠点形成とネットワーク化を支援していくことで、連携や協同を促進していくということが政策的にも進められています。この連携と協同を特に私たちは追求していきたいと考えているわけです。

では、FDネットワークとはどういうものか、ということなのですが、ここでは、「大学の教員や組織が組織の境界を越えて、互いの教育実践を検討し合い、リソースを共有し、より一層改善していくためのソーシャルネットワーク」と一応定義してみました。FDネットワーク化のやり方はいろいろあって、先ほど飯吉先生の方からはオンラインでのネットワーク化の進め方について、非常に刺激的なお話がありました。私たちのセンターもオンラインでもやっているのですが、同時にface-to-faceの形でさまざまな活動を進めています。具体的には、今年度から5年計画で「大学教員教育研修のためのモデル拠点形成」というプロジェクト——来年度からは名称が「相互研修型FD拠点形成」となるのですが——を進めています。

「相互研修型FD」ですが、これは、各大学・学部は、学問分野や大学の種別などの固有の文脈に埋め込まれている。そういう個々の教員や組織が相互に影響し合い、協同し合いながら、教育する集団として形成されていき、ファカルティになっていくことを目指す、という考え方です。私たちは授業の中では、学生と教員の相互性ということ、具体的には「何でも帳」という媒体を使って具体化してきたのですが、それと同じように、教員と教員間の相互性にもとづくFD活動も、このセンターの設立の当初から進めてきました。今度は、それを組織と組織間の相互性にも広げていこうと考えているわけです。

現在、四つのレベルでFDネットワークを形成しつつあります。学内レベル、地域レベル、全国レベル、国際レベルという四つのレベルです。先ほど小田先生のお話の中では、山形大学のネットワーク“樹氷”と“つばさ”は、規模は異なるがかなり同じ考え方でやっているのだと言われました。

京大のものは、空間的には同心円的に拡大しているように見えるかもしれませんが、具体的な中身を見ますと、それぞれに固有の課題と構造があります。例えば学内レベルで言いますと、京大という研究大学において、非常に自律性が高い教員間・部局間で、どのように連携を行っていくか。それから地域レベルになると、今度は非常に規模やタイプが多様である大学間で、どのような連携・協同が行えるのか。

全国レベルについては、このフォーラムもそうなのですが、空間的な制約を越えて、主には個人単位の交流をface-to-face、あるいはオンラインで促進していく。あわせて、FDネットワークのネットワーク化も図りつつあります。さらに国際レベルについていいますと、先ほど飯吉先生からお話があったSOTLは、私たちの相互研修型と非常に

似た理念だと思っているのですが、その SOTL の理念を持った組織と連携していくようなことを進めています。

これが全体の見取り図です。時間の関係で詳しくはお話ししませんが、学内、地域、全国、国際の四つのレベルでそれぞれの活動を進めているところです。

もう少し正確に言いますと、学内、地域、全国、国際という四つのレベルの中には、さらに、個人、部局、大学という異なる単位が含まれています。両者を重ね合わせると、この表に示したような関係になっているのではないかと思います。例えば全国連携の活動として行っているこのフォーラムでは、個人という資格で参加されている方がほとんどではないかと思いますが、地域レベルであっても、関西地区 FD 連絡協議会は大学単位で参加しています。私たちのセンターは直接関与していませんが、医歯薬系や工学系のように、大学の壁を越えて、部局間、いかえれば同じ学問分野同士で、地域連携や全国連携が行われているところもあります。

この四つのレベルのうち、以下では、学内と地域での FD 組織化について詳しくお話ししていきたいと思います。

まず、京大の FD 学内組織化については、最初に西村理事からも、京大の中での難しさがあるというお話があったのですが、京大は大規模研究大学で、非常に部局自治が強い。教員はどうしても、教育よりは研究に活動の重心が傾きがちです。特に法人化以降は、多忙に拍車がかかって、研究でも競争的な資金を獲得しなければいけないし、運営面でもサービス面でも非常に忙しくなっている。

では、教育はどうなっているかという、教育改善や授業改善への動機を考えたときに、京大は自学自習の伝統があって、これは以前京大の教育学研究科におられた竹内洋先生が使われている表現なのですが、「教育栄えて学び減ぶ」という考え方が、京大の先生の中には少なからず浸透しているように思われます。

それから、教員の授業が下手でも、寝る学生はいるのですが、ほとんどおしゃべりはしないですし、そこそこの学習成果を上げることはできるので、必ずしも教員が教育改善に一生懸命にならなくても、これまでのところ、割と問題にならずにすんできたところもあるかと思います。それからこれは組織化の上での難しさですが、各ディシプリンで固有のやり方があって、なかなかそこに口を挟みにくいということもあります。

これが京大の中での学内組織化の流れですが、at と for というのは、at Kyoto University と for Kyoto University ということです。京大のこのセンターは、京大の中にあるのですが、割と早くから全国を見据えた活動をやっていると思います。つまり、at の方です。例えば公開実験授業でも、学内の参加者はすごく少ないのですが、全国からはかなり参加されるということがずっと続いていました。一方、for についてみると、本格的に学内の組織化に取り組みはじめたのは、2004 年度の特徴 GP がきっかけでした。この中で行った工学部の FD 支援、全学の院生研修（プレ FD）、全学部を対象とした教育改善・FD ヒアリング、それからそれをもとにできた全学の FD 研究検討委員会の設置——これは私たちのセンターの田中センター長が、委員会の委員長も務めておられるわけですが——、このような学内組織化のステップをたどってきました。

このようにして、ようやく at Kyoto University と for Kyoto University が両方できるようになってきました。センターができてから既に 15 年も経っており、遅々たる歩みではありますが、ようやく両方を射程に据えられるようになってきたわけです。

先ほどあげた四つのステップについて簡単に見ていきたいと思います。まず工学部の FD 支援についてですが、なぜ工学部かというと、工学部・工学研究科は、京大全体の構成員の約 3 分の 1 を占める大きな部局なのです。ここを手がかりにして学内組織化の基礎を作っていきたいということで、工学部の FD 関連委員会と連携して、授業アンケートの開発・分析、および、4 年生で行う卒業研究が学生にとってどのような意味を持っているのかという卒業研究調査の実施を進めてきました。さらに、こうした調査の結果をもとにして、各学科からお一人ずつ出ただいて自分の授業について語っていただくようなシンポジウムを設けてきました。

2 番目のステップの院生研修ですが、これは大学院生が大学教員になっていくための自己形成と、そういう院生たちのコミュニティ形成を促すためのものです。この取組は、京大のような大学教員を養成する研究大学としての、社会的な責任を果たしていくことでもありますし、いろいろな研究科の院生が参加してきますので、学内組織化の足がかりという意味もありました。ずっと一日研修でやってきているのですが、今年から Basic と Advanced の二つのコースになりました。Advanced は、昨年 Basic のコースに出た院生たちから、もっと進んだものを継続してやってもらいたいという申し出があって、彼らとセンターのスタッフが議論しながら作ったものです。両コースとも、総長名の

修了証を渡しています。これはチラシなのですが、このように丸一日使って2つのコースを同時並行で行っているわけです。

3番目のステップが、教育改善・FDヒアリングで、これも2006年7月に行いました。各部局が実際にどんな教育改善FDをやっているのかが、なかなか部局外にいる人間には見えにくいので、それをまず把握したいということと、それから実際に先生方とお話しすることで、センターの活動についても知っていただきたいという意図があって、このヒアリングを行ったわけです。京大には全部で10学部あるのですが、その全学部に出向いて、学部長、関連委員の先生方とお話ししました。

各部局で、本当にいろいろなお話が聞けたのですが、最初に「FDはどんなことをおやりになっていますか」とお聞きしますと、ほとんどの学部が「FDは別にたいしたことはやっていないです」とおっしゃるのです。けれども、「教育改善のためには、どんなことをなさっていますか」と言うと、それぞれの学部からたくさんの活動の内容が聞けました。つまり、FDというのはすごく形式的なものとしてとらえられていて、教育改善とは結びついていないわけです。私たちは、自主的な教育改善に結びつくような形でFDをやっていきたいと思っています。

このヒアリングがもとになって、委員会が設置されました。ヒアリングの中で明らかになった、各学部で行われているユニークな取り組みを、学部の壁をこえて共有することで、学内に教育改善の文化を作っていきたいと考えたのです。大学によっては、かなり以前にFD委員会を立ち上げたところも少なくないと思うのですが、京大のような非常に部局自治が強いところで、FDの委員会を作るのは、それだけでも大きな一歩であったと思っています。これが組織図ですが、研究科長部会の下にFD委員会があり、その中に二つのワーキンググループがあって、そこに私たちのセンターのスタッフがかかわっています。事務部との連携もできてきました。このようにして、部局単位で行われている自生的FD活動を汲み上げて、それを情報共有していく、あるいは支援をしていくという形で、現在FDの学内組織化を進めているところです。ウェブやリーフレットなどもできてきました。

学内組織化の方法論を簡単に図で示してみますと、最初は個人ベースでセンターが働きかけてやっていたこと——例えば公開授業検討会など——が、今ではFD研究検討委員会の中で承認された活動になっています。院生研修もそうです。

こういう中で、今度は逆に文学部のプレFD支援という活動が、文学部の中から自発的に生まれてきました。これは新たな展開といえるのですが、2009年度から本格化すると思います。文学部には非常にODが多くて、このODのキャリア支援という意味もあるのですが、ODに学部専門科目でリレー講義をやってもらって、それを通じてプレFDを行い、それを公開授業検討会にもつなげていきたいと考えています。ODのプレFDを通じて、文学部の先生方にもFDにかかわっていただこうとしているところです。

ここまでずっと学内組織化についてお話ししてきたのですが、次に、もう一つの大学間連携についてお話ししたいと思います。関西地区FD連絡協議会は、昨年の4月に正式発足したのですが、実はその前から1年以上少しずつ活動を進めていました。現在、五つのワーキンググループがあります。関西地区には四年制大学、短期大学あわせて全部で211校あるのですが、そのうちの118校が参加しています。

昨日から参加されている先生もいらっしゃるかもしれませんが、昨日は研究ワーキンググループの方で「授業評価からFD評価へ」というテーマのシンポジウムが開かれていました。ほかに、例えば情報支援ワーキンググループは、小田先生のお話の中にもありましたが、「こんなシンポジウムを今度持ちたいのだけれど、いい講師の先生はいらっしゃらないだろうか」といった相談に乗っています。

共同実施ワーキンググループでは、例えば初任者研修のような、ある程度大学を越えて共同で行えるようなところは、共同でやっていくような取組を進めています。連携企画ワーキンググループは、共同のテーマを持っているところが集まって、それを一緒にやっていこうと考えています。広報ワーキンググループは、こうした協議会の活動についての広報を行っています。

これは組織図ですが、幹事校が全部で11校ありまして、その中の代表幹事校を京大が務めています。一つ一つは読み上げませんが、大体3～4校ずつがワーキンググループを構成しています。各ワーキンググループに京大が入って事務局的な働きをしているわけです。

私はこの中でFD連携企画ワーキンググループの事務局を務めていますので、そのお話をさせていただきたいと思

います。このワーキンググループは、共通のテーマを抱える大学が連携して、協働して問題に取り組むという形でやっています。

まず、あるテーマでシンポジウムを開いて、その関心を持っている先生や大学に集まっていただいてコミュニティ形成の取っかかりを作る。そしてその中から、特にこれからFDに本格的に取り組んでいこうとする大学に、関西FDパイロット校になっていただいて、そのパイロット校がどのようにFDを進めていくのかというプロセスを、共有していく。そしてこういうテーマを徐々に増やしていくことで、コミュニティを拡大していこうと考えています。

この大学間連携の、ワーキンググループにおける方法論ですが、重要なのはどういうことをテーマにするか、何をもちいて協同・連携していくかということです。昨年5月にカーネギー財団などを訪問したときに、それが最も重要なのだということをすごく強く言われました。今このワーキンググループでは、多くの大学・学科が種別や規模やディシプリンの違いを越えて共有でき、かつそれぞれの固有性を生かしながら、アプローチできるようなテーマを選んでやっています。

第1回シンポジウムは、昨年11月29日に行ったのですが、テーマは「思考し、表現する学生を育てる」、副題が「書くことをどう指導し評価するか」でした。これは、どんな大学教員でも直面する課題だと思うのです。学生の側ではコピー＆ペーストの横行や、書くことの訓練の不十分さが見られる。一方で、教員は指導しなければいけないのだけれど、その方法が分からない。この問題は、かなりの大学で共有されていることだろうと思います。それで11月29日にシンポジウムを開いて、第1部では会員校3校が事例報告を行い、今自分たちがどのような課題に直面しているかも含めて報告していただきました。いろいろなタイプの大学に報告していただきました。第2部では、そういうことを研究していращやる先生をお招きして、その研究について学ぶということをやりました。

この連携にはどんな意義があるのか。ちょっと長いですが、このシンポジウムで発表された先生からメールをいただきました。それが非常にうまく連携の意義を語ってくださっているので、読み上げていきます。

「初年次教育を進めるのは、現場の教員には負担感があります。そのため、初年次教育運営担当者として、アイデア不足に悩んだり反発にあたりして、正直なところ、学部内では孤独感を持っていました」。FD担当者というのは結構孤独感を持っておられる方が多いのではないかと思います。先日のシンポに参加して、シンポジウムIで他学の取り組みに共感し、シンポジウムIIで自分たちの取り組みを俯瞰するような視点を与えていただき、さらにシンポジウムを通じての熱心な参加者に勇気づけられ、とてもよい経験になりました。大学間の連携というのはFDに取り組んでいる教員の相互サポートという大きな意味もあると実感しました。その意味で、日常的に協力し合える地域での取り組みはとても大切だと思います」。こういうメールをいただきました。

このような感じで、FD連携企画ワーキンググループの活動を進めているのですが、このワーキンググループの大きな特徴ともいえる、関西FDパイロット校の試みについてお話ししたいと思います。このパイロット校の目的は、まだFD活動は十分に展開できていないけれども、これから本格的に取り組もうとしている大学を、このワーキンググループで支援していく。その大学に、FDの展開過程を報告してもらって、その他の大学にも参考にしてもらう。そして、単に一大学の自助努力でやるだけではなくて、大学間で連携してFDを進めていくという活動の事例を作っていくという意図があります。現在この2校、神戸常盤大学と藍野大学の理学療法学科がパイロット校になってくださっています。

ここでは藍野大学のFDの展開についてお話ししたいのですが、藍野大学の理学療法学科ではまず、OSCE（オスキー）という評価法を開発しました。これは臨床実習に行く前に、シミュレーション場面を設定して、実習を行えるだけの臨床能力が身についているかどうかを見るという評価法です。医歯薬系では既に広く行われているのですが、理学療法系では、まだほとんど行われていませんでした。このOSCEの理学療法版を開発して、その試験場面をビデオに収めました。そして、そのビデオを、1グループ3～4人の学生に視聴させ、グループごとにリフレクションしてもらったのです。学生自身はうまくやれていると思っていたのに、ビデオを見てみると全然できていなかったり、あるいは、どこができていないのかがよく分からなかったりした。それがこのリフレクションを通じて分かってきた。仕組みは単純ですが、この取組を通じて、学生たちはものすごく大きく変化していったといいます。これは、OSCE-R（OSCEリフレクション法）と名づけられました。

OSCE-Rは、最初は一人の教員が始めたにすぎなかったのですが、その成果が他の教員の関心も呼ぶことになって、

自主的な検討会が開かれるようになり——それは OSCE-R Café と付けられたそうですが——、さらには、授業改革やカリキュラム改革につながっていきました。

今の流れを書きますと、この図のように、最初は一人の教員個人による評価主体の取り組みだったのが、部局全体に広がって、カリキュラムと授業の再構成につながっていった。そういうプロセスとして描けると思います。この藍野大学の事例は、私から見るととても面白い FD なのですが、興味深いことに、藍野大学の先生方の中にはこれが FD だという意識が当初はなかったのです。関西地区 FD 連絡協議会の入会についても、「うちではたいした FD はやっていないので、まだ参加できる段階ではない」と言われていたくらいです。

今では、本当はこれこそが本来の FD だったのだと、先生方も認識されるようになってきています。こういう認識ができてきたこと自体が、FD の歩みとして非常に面白いことではないかと思っています。

まとめですが、教育改善と結びついた自生的な FD 活動を育てていくのが、FD ネットワークの大きな目的だと思うのですが、個人間のヨコの連携だけでは、FD はなかなか持続していきません。個人、部局、全学というタテの組織化が図られ、さらに、こういうセンターが、同僚的・専門的なサポートを行っていくことを通じて、教育改善に結びついた自生的な FD 活動を育てていく。それを FD ネットワークの形成を通じて行っていきたいと思っています。

ご清聴ありがとうございました。

（及川） 松下先生、ありがとうございました。松下先生には、学内組織化と地域連携についてご発表いただき、自生的な FD を支えていくための取り組みについて、また、特に地域連携については連携企画ワーキンググループを中心に上げ、パイロット校という新しい取り組みについてご報告いただきました。

続いて、島根大学の山田先生にご発表いただきます。タイトルは「大教センターはいかに学内組織化に寄与しうるか」ということで、よろしくお願いいたします。

■FD の学内組織化と大学間連携■

第15回大学教育研究フォーラム
2009.3.20-21

**学内・大学間での
FDネットワーク構築
—京大センターの試み—**

松下 佳代
京都大学高等教育研究開発推進センター

1

発表の構成

1. FDネットワークの構築
2. 京大におけるFDの学内組織化
3. 関西地区FD連絡協議会の活動
—大学間連携—
4. 「関西FDパイロット校」の試み

2

1. FDネットワークの構築

3

1.1 背景—質保証とFD義務化

- 大学教育の質保証の必要性
 - 「入口」の質保証→「出口」の質保証(「学士力」)

ユニバーサル化 → 大学 → グローバル化する知識基盤社会

入口 出口

- FDの義務化・実質化への要請

⇕

- 大学の経営難 → FDのためのリソースの共有

4

1.2 背景—競争と協同のバランス

- 競争—辺倒
 - … 1998年大学審答申「競争的環境の中で個性輝く大学」

↓

← 過度の市場化への反省

- 競争と協同のバランス
 - … 2008年中教審答申「教育振興基本計画について」(2008.4)
「学士課程教育の構築に向けて」(2008.12)
- 競争
 - e.g. 「教育GP」(質の高い大学教育推進プログラム)
- 連携・協同
 - 拠点形成とネットワーク化の支援

5

1.3 FDネットワークの構想

- FDネットワークの構築
 - ＝大学の教員や組織が、組織の境界をこえて、互いの教育実践を検討しあい、リソースを共有し、よりいっそう改善していくためのソーシャル・ネットワーク
- 特別教育研究プロジェクト(2008-2012年度)
 - 「大学教員教育研修のためのモデル拠点形成」
(相互研修型FD拠点形成)

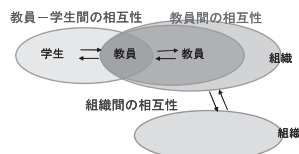
6

1.4 相互研修型FDという理念

● 相互研修型FDとは・・・

＝それぞれに固有の文脈に埋め込まれた自律的な
教員・組織が、相互に影響し、協働しあいながら、
教育する集団として形成されていくことをめざすFDの
考え方 ⇔ 啓蒙型FD・操作型FD

● 3つの形態



7

1.5 4つのレベルのFDネットワーク

① 学内レベル

- 研究大学における、自律性の強い教員間・部局間での連携

② 地域レベル

- 規模やタイプの多様な大学間での連携・協同

③ 全国レベル

- 空間的制約をこえた個人単位の交流 (in-person, on-line)
- FDネットワークのネットワーク化

④ 国際レベル

- 類似の理念 (SOTLなど) をもった組織との連携と研究交流

* 同心円の拡大ではなく、それぞれに固有の構造と課題

8

FDネットワークの構築



9

表1 京大センターによるFDの組織化

	個人	部局	大学	その他
学内	公開授業・検討会 院生研修(ブレFD)	工学部のFD支援 文学部のブレFD支援	FD研究検討委員会 (全学教育シンポ)	
地域			関西地区FD連絡協議会	
全国	大学教育研究フォーラム 大学生研究フォーラム 大学教育ネットワーク		(Web公開授業)	FDネットワーク代表者会議(JFDN) 若手FD研究者ネットワーク(JFDN Jr)
国際			IUB, UNC, マギル大等との連携	カーネギー財団等との連携

10

2. 京大におけるFDの学内組織化

11

2.1 京大ならではの困難さ

● 大学

- 大規模研究大学、部局自治が強い

● 教員

- 研究＞教育
- 多忙化に拍車 ……研究(競争資金獲得)+教育+運営+サービス

● 教育

- 教育改善・授業改善への動機
 - 「自学自習」の伝統 ……「教育栄えて学び減ぶ」?
 - 授業が下手でも、おしゃべりしない、そこそこの成果
- 各ディシプリンに固有のやり方

12

2.2 学内組織化の流れ —at とfor

		レベル
1994.6	旧センター設立 ・公開実験授業	全国 (学内) 全国 全国
1994年度 2001年度	大学教育改革フォーラム 大学教育研究集会 →大学教育研究フォーラム(2004年度～)	
2003.4	現センターへ拡大改組	
2004年度	特色GP「相互研修型FDの組織化による 教育改善」(～07年度) ・工学部のFD支援 →① ・院生研修(05年度～) →② ・教育改善・FDヒアリング(2006.7) →③	学内

13

2006.12	FD研究検討委員会設置 (委員長:田中センター長)	→④	学内
2008年度	特別教育研究プロジェクト(～12年度予定) 「大学教員教育研修のためのモデル拠点形成」		すべて
2008.4	関西地区FD連絡協議会発足		地域
2009.1	国際シンポ「日本のFDの未来」		国際

• at Kyoto U. + for Kyoto U.

• 全学委員会の設置によって、ようやく学内組織化の体制ができた

14

2.3 ①工学部のFD支援 (2004～)

● 意図

- 最大の学部(成員全体の約1/3)
- 部局支援のモデル、学内組織化の足がかり

● 工学部のFD関連委員会と連携

- 授業アンケートの共同開発・分析
- 卒業研究調査
- 工学部教育シンポジウムの開催
(「私の授業」など)



第3回シンポ(2007.12)

15

2.4 ②院生研修 (2005～)

● 意図

- 大学教員への自己形成・院生コミュニティの形成を促す
- 大学教員を養成する研究大学としての社会的責任、学内組織化の足がかり

● 「大学院生のための教育実践講座」(1日研修)

- 2コース(Basic + Advanced)

- ・ミニ講義とディスカッション
- ・ボディワーク
+ 模擬公開授業・検討会
- ・プレゼンテーション



- 修了証

16



2.5 ③教育改善・FDヒアリング（2006.7）

- 意図
 - 各部局の教育改善・FDへのニーズと現状の把握
 - センターの活動の周知
- 活動
 - 全10学部対象のヒアリング（学部長、関連委員など）
- 成果
 - 各学部で自生的な教育改善、実質的なFD活動
 ⇔ 「FD」には抵抗
 - 部局の枠内のみ ⇒ 委員会設置へ

19

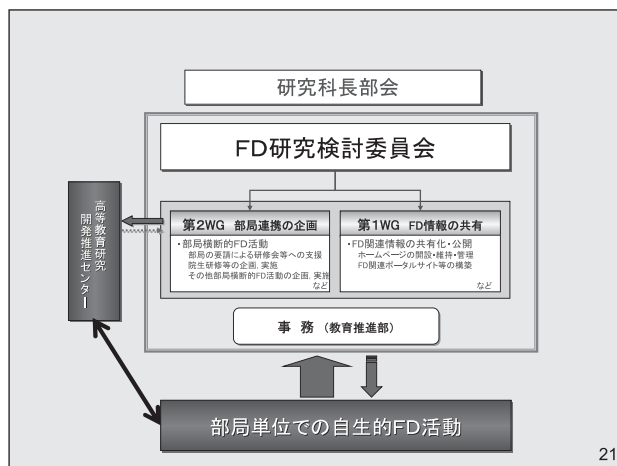
2.6 ④FD研究検討委員会（2006.12～）

- 目的
 - 各部局で行われているFD活動の支援・連携
 - 部局の壁をこえて情報共有
- 活動
 - 2つのワーキンググループ
- 成果
 - 学内組織化の体制づくり
 - ラインの中に位置づく
 - 事務部との連携



第1回授業評価ワークショップ
(2007.11)

20

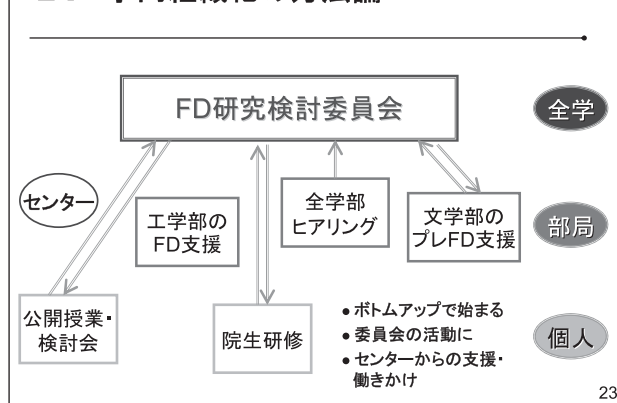


21



22

2.7 学内組織化の方法論



23

2.8 新たな展開

- 文学部のプレFD支援
 - 文学部(思想文化学系)からの提案
 → 委員会・センターの支援
- OD30名によるリレー講義(学部専門科目)
- 院生研修＋公開授業・検討会 の性格
 - 授業担当(年2回/人)
 - 他のODの授業見学・検討
 - 授業アンケート(リフレクション・シート)
 - 年2回のワークショップ
 - 修了証

24

3. 関西地区FD連絡協議会の活動 —大学間連携—

25

3.1 関西地区FD連絡協議会（2008.4～）

● 目的

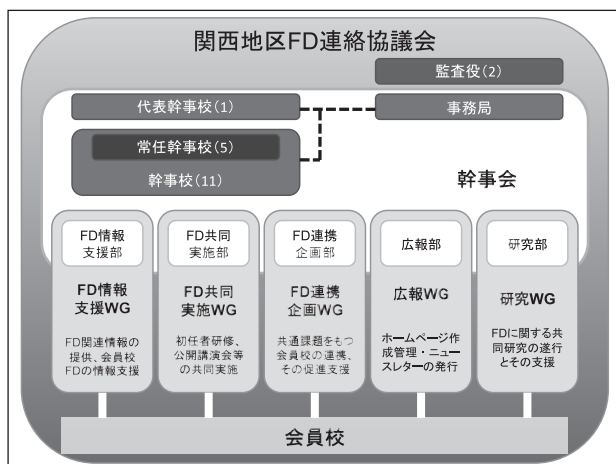
- タイプや規模の異なる多様な大学間での連携・協同

● 組織

- 関西地区の211校中118校が参加、5つのWG

FD情報支援WG	会員校のFD実施に関する情報の収集と提供活動
FD共同実施WG	教育改善活動の質の向上、効率化をはかるため、会員校が共同で実施する活動
FD連携企画WG	共通のテーマを抱える会員校が連携し、協働して問題に取り組む活動
広報WG	協議会に関する広報業務の実施
研究WG	会員校が共同して研究すべき課題に関する企画・推進

26



各WGの実施体制

● FD情報支援WG

同志社大学*+大阪府立大学+京都大学

● FD共同実施WG

大阪大学*+関西学院大学+京都大学

● FD連携企画WG

立命館大学*+関西大学+神戸常盤大学+京都大学

● 広報WG

大阪市立大学*+和歌山大学+京都大学

● 研究WG

神戸大学*+龍谷大学+京都大学、ほか数校

(*は責任校、事務局は京都大学)



第1回授業評価ワークショップ
(2008.1)

28

3.2 例：FD連携企画WGの活動

● 目的

- 共通のテーマを抱える大学が連携し、協働して問題に取り組む

● 活動計画

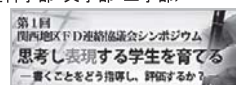
- コミュニティの形成
 - 特定のテーマを中心に交流、先行事例や関連研究の学習
- パイロット・スタディ
 - 「関西FDパイロット校」を中心に、新しいアプローチでFDに取り組む
- 活動の共有
 - FDの進行状況を、関西FDのWebサイトやフォーラムで報告
- コミュニティの拡大
 - テーマを増やししながら、大学間連携の拡大・深化

29

3.3 大学間連携の方法論

● テーマ

- テーマ選択の基準：多くの大学・学科が種別・規模やディシプリンの違いをこえて共有でき、かつ、それぞれの固有性をいかしながらアプローチできるようなテーマ
- 第1回シンポジウムのテーマ：「書くことの指導と評価」
 - 学生：コピー＆ペーストの横行、書くことの訓練の不十分さ
 - 教員：指導・評価の方法がわからない
- シンポジウム…コミュニティ形成の手段
 - 第Ⅰ部：会員校の事例報告（保健科学部・文学部・工学部／小規模校・大規模校）
 - 第Ⅱ部：関連研究の学習



30

3.4 連携の意義

● シンポジウム参加者から

「初年次教育を進めるのは、現場の教員には負担感があります。そのため、初年次教育運営担当者として、アイデア不足に悩んだり反発にあたりして、正直なところ、学部内では孤独感を持っていました。先日のシンポに参加して、シンポジウムⅠで他学の取り組みに共感し、シンポジウムⅡで自分たちの取り組みを俯瞰するような視点を与えていただき、さらにシンポジウムを通じての熱心な参加者に勇気づけられ、とても良い経験になりました。大学間の連携というのは、FDに取り組んでいる教員の相互サポートという大きな意味もあると実感しました。その意味で、日常的に協力し合える地域での取り組みはとても大切なものだと思います。本当にありがとうございました。」 — シンポジウムⅠ報告者

31

4. 「関西FDパイロット校」の試み

32

4.1 関西FDパイロット校とは

● 目的

- まだFD活動は十分展開できていないが、これから本格的に取り組もうとしている大学を、WGが支援する
- その大学のFDの展開過程を報告することで、他の大学にも参考にしてもらう
- 単に一大学の自助努力ではなく、大学間で連携してFDを進めていくという活動の事例をつくる

● 現在、2校

- 神戸常盤大学
- 藍野大学・理学療法学科

33

4.2 藍野大学のFDの展開

● 新しい評価法の試み

- 理学療法版OSCE（臨床能力試験）の開発
- グループ・リフレクションのツールとして（OSCE-R）

● 学生の学びの変化

- 自ら学び始める、臨床実習での評価の高さ

● 教員の変化

- 複数の教員の参加、教員集団の生成

● 自生的FDへ

- 教員集団による検討会（OSCE-R Café）
- カリキュラムと授業の再構成へ
「これって、FD？」「これが、FD」



34

【事例：藍野大学】 評価から学生の学び、自生的なFDへ

OSCE（臨床能力試験）



OSCE-R（学生の学びあい）



OSCE-R Café（教員の検討会）



35

4.3 まとめ

● 教育改善と結びつけた自生的なFD活動を育てる

● ヨコの連携

- 教員間—部局間—大学間

● タテの組織化

- 個人—部局—全学

● 同僚的・専門的なサポート

- センターの役割

FDネットワーク
の構築

36